

基調講演：「地域再生の切り札はニーズ指向型の産官学連携だ」
茨城県工業技術センター センター長 藤沼 良夫 氏

地域の課題

●人口・付加価値・事業所・地場産業の減少

- 都市部の団塊世代に相続資産が集中
- 2030 年の地域経済のシミュレーション…地域内総生産の盛衰が分かれる
- 1 人当たり付加価値…サービス産業は減少、製造業は右肩上がり
- 県内事業所は減少、平成 8 年以降廃業が開業を上回る…新しい風の必要性
- 生活様式の変化「人間はモノを消費しているのではなくイメージを消費している」
- 地域再生のため、物語性、まちづくりの連携、新しい風、新しい仕事を造る

中小製造業の産官学連携の課題

●なぜ産官学連携か

- 中小製造業にとっては技術開発が生命線 【技術開発＝差別化】
- 差別化実現の手段…自己完結型か外部資源活用（産官学連携）か
- 産学官連携の課題
（これまで）シーズオリエンテッド⇒（今後）ニーズオリエンテッドへ
- 製造業の類型（企業規模、業態）…産官学連携が可能な企業群は全体の数%
- 産官学連携は評価・診断他多様な対応が可能 ⇒技術移転＋ニーズ発への転換

工業技術センターの事業展開

●Ⅰ技術支援、Ⅱ依頼型事業、Ⅲ提案型事業の 3 本の柱

- Ⅰ、Ⅱの企業ニーズ発対応に 7 割を注力、Ⅲに 3 割の事業展開
- 企業との信頼の絆に強み…産学官連携に活用

●産官学連携の要としての役割

- 中小製造業は試作・生産・技術開発に注力
- 企業のニーズをつかみ、大学・大企業のシーズに結びつける要＝センターの役割

産官学連携の事例紹介

●地域産官学共同研究事業

- 電動車いす、ピョン太文庫…ターゲットを明確化
- ピュア茨城（日本酒）…県開発米＋工技セ開発酵母
- 真壁石材…桜川未来塾によるまちづくりとの協働事業
- 化学プラント配管外面腐食診断システム…【学（ロボット技術）】が参画
- いばらきレアメタル・リサイクルシステム
…産総研、物材研、環境研の知力を結集、日立市で実施

今後の産官学連携

● 尊徳仕法

- 恒産なくして恒心なし
- 管理経営、戦略重視、現場第一主義、モチベーション、標準化の導入

● 結城紬

- 芸術系大学研究室の進出・関与に期待
- 1 商品展開、2 着物文化展開、3 まちづくり展開、4 連携・交流展開、5 プロジェクト実施支援、6 地場産品展開

● 食の起業家

- マーケットイン型食品産業の創出
- 県産農作物は東京向け安価大量生産品（＝プロダクトアウト）が大多数
- 産出量は全国有数だが、製品化（高付加価値化）をしないまま出荷
- うるし、フルーツトマトの高付加価値化成功事例

● 21世紀型公共事業を考える

- 学の活躍場面は多様、求められる資質も異なる
従来：2次産業（ものづくり）⇒今後：1次産業（アグリ）～3次産業（観光）
- 地域・産業・技術を見る高み
産の目：直面する課題
官の目：少し未来の課題、
学の目：求められる視点＝日本・世界レベル

短期

長期

まとめ

- 地域再生には新しい仕事をつくること
- 学の参画では文系・農学部へ期待
- 地域産学官のキーパーソンのネットワーク
- 地域・まち・組合・団体・企業とのビジョン共有
- 継続的な活動

Q&A

- **Q.** つくば（大学）発ベンチャービジネスの特徴、課題は。
- **A.** 大学発ベンチャーには日本の未来を作るよう企業・産業を期待したい。そのベンチャーには光るシーズがあるはずで、そこに学の「知」を投入して後押ししてほしい。また、そのために金融や政策面で一段の支援が必要。

- **Q.** 講演中に指摘された「資質」とは。
- **A.** ①人の話を聞く、②威張らない、③自ら手を汚す・下す、④進化する、⑤継続する、ことがポイント。

- **Q.** 農産物は7割が東京への流通となっている。農業者でこれを変えて新たなビジネスモデルを生み出そうとする経営者は芽生えているのか。
- **A.** 複数名のビジネスモデル提案者・実行者を承知しており、これら経営者を支援していく必要がある。なお、これらの意欲的な経営者は既存業界内で軌轢を生んではいるが、高い収益性から周りの納得性を得つつある。

- **Q.** 農業分野は規制が多いものの、規制の中で自由な流通や連携を生むのは難しいと捉えられるが、そこを打破するためにはどのようにしていくべきなのか。
- **A.** このまま放置しては疲弊してしまうことははっきりしており、土地を集約する、自動化する等によって、工業者も含めてマーケットインの発想で盛り上げていくことが大切。

以 上